

## 「生誕 100 年 清宮質文」の楽しみ方をいろんな人に聞く「清宮質文」の歩き方 ①

最初は小説家、糸山秋子(いとやまあきこ)さん。



《孤独な魂》



《火を運ぶ女》



《蝶》



《夜》

…清宮さんのテーマは光だったのですが。(学芸員)

**「一つ目の魂も、大事に運ばれる火も、蝶のまわりにただよう円もみんな光。蝶だって光だと思えます。ろうそくの火もこちらをみつめる目にみえます。」**



《トンネルの出口》 《トンネルの出口 作品集『暗い夕日』3》

…清宮さんは最初は暗めに描きますが、木版画で摺るうちに明るくなるようです。(学芸員)

**「一つ目の人影がろうそくに似てますね。最後の絵はトンネルが明るいけれど、人影は暗い。夕日の向こうとこちらを強く意識させられます。」**



《壇の中の魚》



《黑夜の鳥》

**「この魚と鳥は同じですね。壇の中にいた魚が、空を舞う鳥になる。君はあの魚だね？という感じ。」**

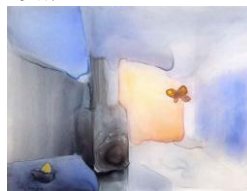
…ガラスに描いて摺るモノタイプ(1枚摺り)の技法から、直接描く手ごたえを感じます。(学芸員)



《悲しみ》(モノタイプ)



《蠟燭を消す》(水彩)



《夕べの空へ》(ガラス絵)

**「もう抽象画ですね。木版画でも版と清宮さんが一体になって『私たち』になっている。そしてついにろうそくを消しました。消せたんですね、消しても暗くない。亡くなる年のガラス絵も、こんなに明るい。」**

大事に灯して、消さないように運んでいたろうそくを消せたんですね！ろうそくも筆で描くのではなく、紙を貼ったもの。紙も筆も手も目も、もうみんな一緒になって…。絵の中の火を消しても、もう心に灯っているから大丈夫なんですね。(学芸員)

**「ほら、ガラス絵の室内に、ろうそくが灯ってますよ…。」**